

Z318a 麻田剛明和二年乙酉見行艸

平井正則（福岡教育大学）, 岩見輝彦（国東市三浦梅園資料館）

18世紀江戸中期の自然哲学者三浦梅園（1723-1784）の旧宅改修工事中、襖の下張りから天文学者麻田剛立（1734-1799）自筆の暦草稿「明和二乙酉見行艸」が出現した。我々はこの草稿の来歴、内容を精査し、特に、記述の1763年（明和二年）2回の皆既月食の予報（推歩）を解析、天文学的評価を試みた。

この草稿は麻田剛立が杵築藩士時代の最後の数年に行った月食推歩とその観測結果を加えて近在の三浦梅園に送った「見行草」と結論する。廃棄され、襖の下貼りとして出現したこの古文書とは観測重視の麻田剛立が、晩年に、若い時代の自筆観測結果・予報について、特に、数値データへの不満から弟子である三浦梅園の長男三浦黄鶴に数値の訂正を望み、最後には“破棄”の指示に至ったのではないかと推量する。

日本を代表する幕府天文方暦作の発展に貢献した民間天文学者麻田剛立の波乱の研究履歴を明らかにするうえで重要な発見と考える。